

令和4年度 第2回 浪江町環境審議会 議事録

◇開催日:令和4年12月22日(木)

◇会場:浪江町役場 301会議室

◇出席者

(委員)川崎会長、河野委員※、前司委員、佐藤委員、會澤委員、澤村委員 ※オンライン出席
(事務局)産業振興課長、新エネルギー推進係長、新エネルギー推進係1名、他委託業者3名

◇次第

1 開会あいさつ

2 議題

(1)前回指摘事項と対応方針

(2)計画素案の内容に関する要点について

(3)(仮称)浪江町地球温暖化対策総合計画の素案について

(4)計画素案および全体を通しての質疑応答・意見交換

(5)今後のスケジュール

3 閉会

◇議事録

1. 開会あいさつ

産業振興課長

2. 議題

(1)前回指摘事項と対応方針

事務局より資料3について説明した。

質疑等特になし

(2)(仮称)浪江町地球温暖化対策総合計画(案)について

事務局より資料4について説明した。

(3)(仮称)浪江町地球温暖化対策総合計画の素案について

事務局より資料5について説明を行った。

(4)計画素案および全体を通しての質疑応答・意見交換

(委員)前回の意見を反映して、町民のメリットが表現されたり、町民向けや事業者向けのガイド版を作ったりするのは良いと思った。ただ、いいものを作ってもガイド版をどうやって町民に届けるのか。

(委員)町の立場としてすべてのものを盛り込まないといけないという立場も理解できるが、総合的な資料が、いったい誰のために、何のために作られているのかがあいまいになってしまっている。資料ごとに目的をしっかりと持って作らないと伝わらないのではないかと。

(事務局)ガイド版では町民向け、事業者向けそれぞれの目線で届けるために作りたい。周知方法についてご指摘いただいたが、策定後に広報紙にはさんで町民へ送ることを考えている。ただその後も、広報紙が届かない方などへ PR していくために引き続き情報発信の手法を考えていかないといけない。情報発信のプラットフォームづくりなども考えていきたい。

(委員)町民にとっては専門的な用語が多いため、説明がないと理解するのが難しい。漫画のような明るいイラストで優しい言葉での説明がほしい。町の将来像がもっとわかりやすくなるとうい。

(事務局)行政計画として書かざるを得ないこともあり、この中ですべてを落とし込むのは難しい面もある。計画策定後に情報発信体制を整えて、細かく発信し続けることが大切だと考えている。町民の心に届く広報をしていきたい。

(委員)町民にとって、事業者にとって、これに取り組むことでどんないいことがあるのかを分かるようなものがほしい。

(事務局)他市町村のパンフレットなどを見ていると、4コマ漫画などで分かりやすく表現していたりする。その中で取り組まないといけない危機感や取り組むメリットを凝縮させて記載して伝えていき、計画策定した後も PR し続けることが大切など認識している。

(委員)カーボンニュートラルを達成するのは大変だからこそ、浪江から先進的に進めていかなければ難しい。もっとアピールしてカーボンネガティブまでいきますよ、みたいな宣言をするなどの方法もあるのではないかと。いま電気代やガソリン代も高くなっており、もっと本気で考えていかないといけないということを日本人は気づかないといけない。それを浪江からやっていってもいいのではないかと。もっとチャレンジした目標でもいいのではないかと。無難な数値目標に感じる。また、町の将来像がぱっと見たときに何が言いたいのかが分からないため、わかりやすい PR ポイントがないと、項目ごとに一言でわかりやすく表現したほうが良いのではないかと。

(事務局)2030年二酸化炭素排出量4万トン、カーボンニュートラル達成率50%としているが、この目標が達成できたときの町の状態というのは、すべての公共施設や駅前再開発工リでは RE100 を達成しており、産業団地では再エネ率50%達成しているという状態であり、役場としてできることはすべて乗せた目標にしている。プラスアルファとして記載できるのは事業者や町民の方にどれだけやっていただけるかということ。この状況をご理解いただいたうえで、もう少しチャレンジングな目標設定については精査させていただきたい。

(委員)この数値目標が何を意味するのか 町民からしてもよく分からないと思うため、表現に

についてもご検討いただきたい。

(事務局)おっしゃる通りであり、この目標のために町民が何をしていけばいいのかといったところも含め表現については検討したい。

(委員)浪江町やこの浜通りでは変化の要因が大きいので、目標を立てることが難しいと思う。この目標が意味することが町民に伝わるようにしてもらいたい。我慢しなければいけないといったところだけではなく、町民にとってこんな良いことがあるんだという部分もわかると良い。

(事務局)KPI の指標についてだが、今後の進捗を把握していくために届け出制度による現状把握などの体制をこれまでのアナログではなくデジタルで取り組んでいくことが必要と考えている。そのための前提としての条例整備なども考えていきたいと思っている。水素ステーションの数値目標については今後どれだけFCVが増えていくのかといったところを指標にして精査したいと思う。

(委員)このそれぞれの施策について予算との紐づけがされた上での設定になっているのか。

(事務局)すべてがすべて予算を担保できているかということそうでないものも多数あるが、現在環境系の国の補助メニューが豊富になってきているため、このメニューを使えそうといったイメージをしながら設定をしている。

(委員)届け出制やデジタルの推進に関して、呼びかけだけでは変わらないものだと感じる。欧米で企業があれだけ脱炭素取り組んでいるのは、子供たちが脱炭素前提になっていないとその商品を買わないなど、ムーブメントのような抗えない流れがあるというところがある。ムーブメントを作るには、デジタルの面で言えば、ただデジタル化にすればよいのではなく、デジタルになったからこそムーブメントになる。一人ひとりがやった取り組むが他の人にも見えるといったことが大切である。

(事務局)いまご意見をいただいて、この施策の中に環境教育の視点が入っていなかったことに気づいた。子供たちから、まだそんなことやっているの？と言われると大人はグサツとくる。そういった間教育の視点を計画の中に取り入れたい。

(5)今後のスケジュール

事務局より資料6に基づき今後のスケジュールについて説明した。

4. 閉会